

松井石根

参考（資料室展示パネル・ウィキペディア等）

漢学者松井武国の6男として明治11年名古屋に生まれ、明治22年6月、**愛知県収税部富岡出張所**の所員として武国氏一家は富岡へ移り住み、石根少年、実弟七夫少年（後年陸軍中将）共に在学した。石根少年は八名高卒業後、成城学校、陸軍士官学校（次席）、陸軍大学校（首席）を卒業。陸軍大学校在学中に日露戦争に従軍した。参謀本部附、外国駐在武官、ジュネーブ軍縮会議全権委員を歴任、昭和10年予備役編入、



同12年現役復帰、中支那方面軍司令官、当時の**首都南京を攻撃・占領**した。南京戦後に、一部の兵士によって掠奪行為が発生したと事件の報を聞き、「皇軍の名に拭いようのない汚点をつけた」と嘆いたという。

後の東京裁判における宣誓口述書では、一部の兵士による軍規違反の掠奪暴行は認めたものの、**組織的な大虐殺**に関しては否定している。しかし、不法行為についての防止や阻止・関係者の処罰を怠ったとして**死刑の判決**を受ける。この判決について、ジョセフ・キーナン検事は、『なんとという馬鹿げた判決か！松井の罪は部下の罪だ。終身刑がふさわしいではないか』と判決を批判している。ここでいう部下には、皇族の朝香宮鳩彦王が含まれており、昭和天皇の免訴問題と絡み、松井が身代わりになったという指摘が存在する。

昭和23年12月23日、**A級戦犯七士**と共に処刑された。現在、松井大将の霊は、熱海市伊豆鳴沢山の興亜観音及び同所七士の墓及び三河湾の三ヶ根山頂の殉国七士の墓に祀られている。



松井軍司令官らの南京入城と城門前の日本軍

各師団や各連隊は南京城一番乗りを競った。昭和12年(1937)12月10日から始まった攻撃は、多数の日本兵士の犠牲を招きながらも激しく続き、13日夜明けには、中国軍の組織的抵抗は終わった。17日午後1時30分、松井石根方面軍司令官を先頭に入城式が行われた。この写真は空輸によって同日の夕刊に大きく報道された。だが、その間に南京事件の惨劇が起こっていた。